慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	全体討論
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2011
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011.) ,p.273- 282
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2 : 事典がひらく新たな世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0273

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

全体討論

司会　まず最初に今日ご報告いただいた先生方からのご質問に、編集委員から答えさせていただきたいと思います。『慶應義塾史事典』も『福沢諭吉事典』も編集委員長は設けていないのですが、委員会のときに座長を務めていただいた先生はいらっしゃいまして、『慶應義塾史事典』は小室先生にお願いをしていたので、小室先生のほうからまず井上先生のご意見について、編集委員会で議論したことなどを答えていただければと思います。

小室［正紀］　非常に厳しい貴重な意見をいただきましてどうもありがとうございます。さすが先輩からの意見だという感じがします。と申しますのは、われわれが一五〇年のために何かしなくてはならないと考え始めましたのは、きょうもここにいらっしゃる坂井達朗さんが福沢センターの所長をしていたときで、そのときにいろいろなことを考えて、事典というのは一つの候補として上がっていました。ただ、坂井さんは歿後百年を記念した『福沢諭吉書簡集』に忙殺をされまして、結局一五〇年のことを始めたのは坂井さんのご退任のあとということになったのですけれども。

そこで事典についていろいろ調べてみると、最初に目についたのが『関西学院事典』で、だから先輩だということなんです。大学の事典はこういうかたちでできるのか。そしてさらに調べてみたら日本女子大学さんもある。こういうかたちでやろうということを、編集委員会でだんだん煮詰まって相談をしていったわけです。

それでいろいろご指摘いただいた点について、少しご説明をいたします。まず「多事争論」でいいのか、通史を書かなければいけないのではないかという、これがいちばん根本的なご指摘だと思います。もちろんわれわれは、通史は必要な

いと考えているわけではありません。ただ、慶應義塾の場合には『百年史』があります。『百五十年史』を書くとすると、そのあとの五〇年を書かなくてはならない。また、少し前に早稲田大学が『百年史』を出されました。これは、膨大な大学史で、しかも、まずは仮版を出して、そして正版を出すという、期間も手間も非常にかけた企画でした。われわれの場合、自分達の力を考えた時、とてもこんなことは、とくに戦後の五〇年を入れ込んでできないということがありました。

いろいろ侃侃諤諤議論がありまして、決して弁解するわけではないのですが、通史を書かないということではなくて、一五〇年の時点に『百五十年史』を書くのは無理だということになったのです。ですから「序文」に書いてある「『多事争論』こそが義塾にとってふさわしいという観点」というのは、いろいろ取り交わされた議論の中の一つで、そのような意見も含めて「さまざまな見方が取り交わされる中から、現時点で最適なものとして、事典というかたちが選択されました」ということです。まずは事典を一五〇年のときに出して、これはある意味では、通史のボーリング調査みたいなもので、いくつかの観点で項目を並べてみて、こんな並べ方ができるかなということを試行してみるというような面が、たぶんあったと思います。大日方先生からも「ある部分通史になってるじゃないか」というようなお話がありましたけど、こういう方針でしたからおっしゃるとおりの面はあります。

それと同時にそのあとに資料集を出して、そして一五〇年のときから二五年か、場合によっては五〇年たったところで『百五十年史』の通史が書けるのではないかとも考えました。それくらい時間を費やさないと、とくに現在の大学は組織が膨大ですから、なかなか通史を書くだけの俯瞰ができない。慶應義塾の場合もいま学部が一〇学部、高校以下の学校が八校、それから病院があって、事務組織があり、さらに一〇以上の研究所があります。通史というのはそれらをまとめて一つの流れにしなくてはならないわけですから、これはそう簡単にできることではない。ところがそういうものを完全には流れになってなくとも全部入れ込めるのは何かというと、事典というものがあるわけです。そこでまずは、現時点でできる最適なものとして事典を選んだというのが、編集委員会の考え方だったと思います。

そのほかもすべてご指摘いただいたところは、痛いところで、今後もし『事典』の再版ができるならば磨いていかなくてはいけないところだと思います。たとえば、『義塾史事典』と『福沢事典』で項目同士のすり合わせが十分にできていないというご指摘がありました。ある程度はわれわれも、同じ項目が立っているところは、相互に違和感が無いよう配慮したのですが、それでも十分なすり合わせであったかどうかは、

ご指摘のとおりだと思います。

ただ、それと同時に、大学史の事典である『義塾史事典』と、福沢の個人事典である『福沢事典』とでは、ウエートをおく部分が違うということもあって、むしろそれぞれの事典の主旨に応じて書き分けようという観点もあったということは、申し添えておきたいと思います。

それから、「組織上」の問題で、ご指摘いただいた点は、よくも悪くも慶應的で、元々組織としていい加減な所です。なぜ「Keio-gijuku University」じゃないのか。これもよく考えてなかったのですが、おそらく「ペンのマーク」の校章もそうなんですけれども、自然発生的なものが非常に多い。そうだとすると、いつから「Keio University が英文として使われ出したのかというのが、たぶんわからないのだと思います。おそらく公式に「Keio University」を使い始めた時点はわかるかもしれませんけれども、非公式に使い出された最初というのはなかなかわからない。ペンのマークも学生が勝手に使い始めたところから始まってるというようなこともあります。

それから「理事会」ですが、ほんとうに、「理事会」という項目がないのかなと思っていま見たのですけど、たしかに、ないので驚いています。「評議員会」はあります。それは実は慶應の歴史をよく表していまして、慶應義塾は評議員会が支えていて、理事会というのは旧制大学で大学になったときに組織上つくられたという面があって、そういう点でおそらく通史的に項目を立てていくと、理事会というのはあまり重要じゃないということになって（笑）、結局、言及されないということなんだと思います。でも、これはやっぱり項目として立てなくてはいけないところだと教えられました。

それから、とくに「人名項目」について、立っている項目であまり重要じゃないものがあるのではないか。立ってない項目で重要なものがあるのではないかというようなことですが、これも実に痛いところを突かれてしまいました。井上先生もよくご存じだと思いますけど、人名項目の選択がいちばんたいへんです。で、われわれの場合にはまず物故者に限るというようにしました。物故者の中で大学評議員会の議長とか塾長とか、そういう方は全部取り上げましたけれども、塾長といえどもご存命の方は取り上げないというようなかたちにしてあります。そういうことで鳥居塾長や安西塾長は取り上げなかった。編纂中に石川塾長が亡くなられまして、そして慌てて石川塾長の項目をつくったというような、そういうような次第です。

それからもう一つは、編集委員会の力量に限界があって、人名の選択に関しては、ある部分は慶應義塾の中の各部局に任せなければならなかったという事情があります。たとえば、理工学部に任せると、どうしても理工学部にとって重要な方

が選ばれることになります。しかし、その方々の中には、慶應義塾全体の歴史のなかではあまり大きな活動をされてはいないというような方も入って来てしまう。そこらへんを十分にすり合わせられなかったというところはあります。

もう一つは、たとえば、伊藤博文とか岩崎弥太郎とか大隈重信といった有名人についてですが、これはたしかに『義塾史事典』には出てないです。ですけどこれは『福沢事典』のほうに譲るというかたちで意識的に『義塾史事典』では扱ってない。ただ、尾崎行雄に関しては義塾史との関係も深いと判断して両方で扱っています。ここらへんも微妙な判断で、人名に関してはともかく最後までこれでよかったんだか、どうだったんだか、悩みの種でした。

しかも、「もっとコンパクトに」というお話がありましたが、これでもコンパクトにしようと思った。実はもっともっと増えてしまう可能性はあったのです。お答えになったかどうかわかりませんけれども、そういうようなちょっと裏をお話しまして、とりあえずご質問への答といたしたく存じます。

司会　どうもありがとうございました。それから続いて秋山先生のほうからご指摘があった点について、私は司会者ですがお答えしたいと思います。

『義塾史事典』と『福沢事典』の編集委員はぞれぞれ一一名、一〇名いるのですが、両方とも女性は私一人でした（笑）。それが慶應義塾のスタンスを表しているというふうに言えるのではないかと思うのですが。『義塾史事典』の人物項目に女性は二人だけです。『福沢事典』のほうも、日本の女性で福沢の親族以外は、下田歌子と棚橋絢子の二人です。業績本位で選んでいくと、女性というのはどうしても落ちていってしまいます。慶應義塾にはたくさん卒業生がいますので、選ばれるのはむずかしいです。女性であるということを加味するかしないか、しないのが平等なのか、するのが平等なのかという判断は、非常に難しいところでした。これは大きな課題だと思います。『義塾史事典』に付録としてつけた資料からは、各学部の女性教員の採用率などがわかるようになっております。慶應義塾の男女共同参画への取り組みなども、それを通してわかるようには、なっております。

続きまして『福沢事典』は座長を務めていただいた松崎先生のほうから、大日方先生のご質問に、お答えをいただければと思います。

松崎［欣一］　松崎でございます。井上先生をはじめとして非常に耳の痛い、あるいは、厳しいご指摘をいただいて、また、もう一つ耳の痛いというか、面映ゆいようなお褒めのことばもいただいてありがたいと思いました。

ご指摘のあったことがらは、いま小室さんからの話にも重なりますが、散々議論を重ねたというところが正直なところ

です。たとえば具体的に申しますと、「人物」のところですね、『福沢事典』では二三九名が挙がっているんですが、当初は三〇〇人ぐらいを考えておりました。だんだん減っていくのですが、それは一つは、頁数の制約ということです。『福沢事典』は一一六四頁というかなりの分量になってしまったのですけれども、あれを削れ、これを削れということで減っていくというような経過がありました。

それからもう一つ、多少客観的な基準になるかもしれないのですけども、人物の選択について、『福沢事典』は『義塾史事典』との対比で、とくに福沢との関係を中心に挙げていきたいと考え、そのときに拠りどころとして福沢が差し出した書簡がどのくらいあるかを考えました。ただ、書簡も結果的に残っているものですから、絶対的な基準にはなりませんけれども、かなり大きな拠りどころにして選択をしました。

それからもう一つ大日方先生のご指摘で「人物間の関係がわからないではないか」という問題ですけれども、これについても実は散々議論は重ねました。たとえば、いろんなカテゴリーを考えまして、福沢の場合に、たとえば中津の出身なわけですけれども、中津の人脈とはどういうつながりが出てくるか。あるいは、あまり知られていないことかもしれませんけれども、仙台藩との関係もかなり密接なんですが、そこでどういう人物が出てくるかといったことを考え、そういう類別をして、「これこれの人びと」というような項目もその人物事典の中に入れたいとかなり考えていました。しかし、これも実際には量的な問題と、去年の一二月のうちに出さなければいけないという時間的な制約でした。そんななかで見切り発車をして最終的にああいうような結果になったということだと思います。

それからもう一つ、民権運動関係で、とくに改進党、大隈と三田の関係も、関心は非常にありました。私自身も演説会の回数を調べ、かなり関心はあったのですが、いかんせん拠りどころがないというところです。藤田茂吉なんていうのはかなり重要な人物だと思うのですけれども、何か論ずる材料がないと、そんな点で悩んだところでした。お答えにならなかったかもしれませんけれども、終わります。

井上　一つだけ言い忘れたことがあります。それはですね、私たちはキリスト教主義の学校で、実は明治以降の文部行政のなかで、キリスト教そのものに対するいろんな軋轢がありました。で、そのことを私たちは非常に気にして書かざるを得なかったことがある。そういう点では、もちろん日本の学校制度のなかで慶應もあるわけですけれども、慶應のこういろんな歴史を見たときに、文部行政がこうなったのでこのような対応をとったということが、比較的少なくてもすんだ。

たとえば、関西学院の場合は中学部であっても中学校にはなり得なかったんですね。それはいま話しましたように、キリスト教の科目を「道徳」と名称を変更しても開講すべきかどうかという課題があったし、たとえば、男子校ですので徴兵検査をどうすれば逃れられるかといったさまざまな社会とのつながりのなかで苦労したこともあって、絶えずそのことを気にしながら運営されてきました。したがって『関西学院事典』の場合は、そういうキリスト教的な、宗教的な問題の項目を挙げて、それの対応をどうしたかということを書かざるを得なかった。それは慶應とは明らかに違っています、学校のあり方が。そういう意味では慶應自身が文部省よりも先にできた学校として、いろんな点でリードしたのに対して、関西学院も含めてやはりそれで流された部分もあっただろうと。

その一つが、奉安殿のあり方についても、今日のシンポジウムの前におうかがいしましたけれども、関西学院はちゃんと東に向いて礼をするように建物内に奉安庫はつくられていましたし、通常の朝礼とは違って、宮城遥拝は東に向いてちゃんと礼をするように――そういう写真も残っていますので――そういうさまざまな違いがあるものですから、ずいぶん私学といっても違うなということは正直なところであります。キリスト教でも宗派によってずいぶん違いますので、そのことは私たちにとっては慶應を学ぶと同時に、関学のキリスト教主義学校の特徴も今後学んでいきたいという具合に思っています。

司会　それでは何かご質問があればぜひお願いしたいと思います。

池尾［愛子］　早稲田大学の池尾と申します。今日はその『福沢事典』、『義塾史事典』について、背景を含めて興味深いお話をうかがえてよかったと思います。

それにもかかわらずちょっと私は、今日は毛色の変わった報告をされました宮内先生にちょっと質問したいというふうに思っています。この『福沢事典』『義塾史事典』から、「スタティスティクス」に関する部分ですね、日本における統計学の展開を拾われたということで、こういう研究、こういう使い方ができるというのもすごいというふうに思います。

先生は統計学、計量経済学の専門家ということであります。それで私は統計学、計量経済学の専門でもないのですけれども、「ヒストリー・オブ・ジャパニーズ・ディベロップメント・エコノメトリックス」という論文を書きました、で、いま校正中です。来週の土曜日にはこちらで報告させていただくことになっております。その関係から言いますと、国際比較を考えて書いておりますので、先生のアプローチとは全然違うことになります。だから海外の人にわかりにくい部分は、

結局バサッと落としてしまうことになったんです。そうするとこの統計学の展開等、日本でみましたときに一九三〇年の国際統計協会の東京大会であるとか、エコノメトリックス・ソサエティーの設立ですね、そういうもののインパクトが私の書くものでは強くなってくるんです。『義塾史事典』が使えるそのあとの時代だと、どうなんだろうか、先生は試みられたんだろうかといったようなところを、おうかがいしてみたいと思います、よろしくお願いします。

宮内　まず、残念ながら私は一九三〇年以降においてその慶應義塾やその周辺において統計学、あるいは計量経済学がどのような展開を示したかといったことは、調べておりません。

ただ、日本における統計学、あるいはその計量経済学の進展とは、大きく分けて二つ大きな流れがあるように思います。一つは、やはりこの三田、あるいは一橋の経済研究所ですね、そういった一つの流れ。それから、もう一つは、先ほど申し上げました東京帝国大学における統計学というより統計研究といいますか、大きなそういう二つの流れがあると思います。

それで、とくに東京帝国大学のほうは先ほど申し上げたようにマルクス経済学における統計調査です、これを中心として進展していると。それに対して三田および一橋経済研究所を中心とした統計学、あるいは計量経済学の研究というのは、統計的な調査もあるのですが、これはとくに三田の場合は寺尾琢磨による確率論の導入です、これが中心になっていたというところが大きいと思います。それに特徴づけられていると思います。その点ではおっしゃるようなエコノメトリックス・ソサエティーで議論されていたものが、その三田であるとか、あるいは一橋ですね、そういったものにかなりきちんとしたかたちで受け継がれていたということは、言えるのではないかと思いますが。

たいへん雑駁なお答えしかできないのですが、もし『義塾史事典』や『福沢事典』などでこういった点について触れられているというようなご意見がありましたら、ぜひ私のほうは教えていただきたいのですが、いかがでしょうか。

司会　ありがとうございます。ではどなたかほかにご質問のある方はいらっしゃいませんでしょうか。

井上　これも、もう一つ出版後困ったのは、今回の慶應のこの事典に収録されているデータはもう一年一年古くなりますね。そうしたときにおそらくこのデータの部分を今後どのように、毎年とはいわないにしても五年に一度ずつでも改訂するかという課題が残りました。事典にしてしまうとそれができない。いちばん辛い状況にあります。たとえばわれわれもこの古い一〇年前のデータを職員の新しい方が読まれて、その旧いデータを信じてしまう。そういう点でのここがそれこそデータと、つまり現状を示すようないわゆる学事報告に当

たるものと、こういう事典とがどんなふうに組み合わせるかということが、今後非常に大きな課題になるという具合に私たちは思っております。

司会　それぞれの時代に慶應義塾が担っていた学問の水準ですとか、方向性というようなものは、たしかにあまり事典に出てこないです。それは、できるだけ客観的な記述を求めたことに起因しているかもしれません。先ほど小室先生のほうからもご説明がありましたように、各学部の記述は各学部にお願いをして作りましたが、そうすると、自分たちはいかに素晴らしい研究をやってきたかという記述が、ものすごく多くなってしまいました。そこでそうした記述はかなり省いてしまったんです。考えてみれば、省きすぎた部分もあったのかもしれないというふうに、いまお話をうかがっていて思いました。

それからデータの部分も、たしかにどんどん古くなっていってしまうのですが、それなりの意味もあります。たとえば、創立以来の入学者の数ですとか、職員の数といったものを一覧表で載せました。一覧表で載せようとすると、どう計算しても縦の数字と横の数字の合計が合わない。縦の数と横の数が合わないまま、もう何十年もその表が出回ってきていたんだということに愕然とするものがいくつかありました。一五〇年のこの時点で一つ表をつくっておくと、今後ここまでの確定したデータとして使っていただけるのではないかと考えました。確かにデータが増えていくと、もっと使いやすいものになると思いますので、これから考えてみたいと思います。

もしご質問がないようでしたら、最後にまた先生方に一言ずつお話をいただいて、終りにしたいと思いますが、それでよろしいでしょうか。では、井上先生から。

井上　私はよけいなことしゃべりましたが、ただ、一点「尹致昊」のことを少し話したいと思います。『義塾史事典』に尹致昊が出てくるのですが、実は尹致昊には『日記』もあるということを先ほども申しましたけども、関西学院と深い関わりがあったということが近年明らかになりました。その『尹致昊日記』はレジュメにも書きました。尹は二代目の院長であります吉岡美国、実質的にはこの方が、学校をランバスさんが創れと言って創ったものですから、その方とアメリカの留学時代に宗教観について論争したこともあって、関西学院と慶應とどちらと深い関係にあったのかと思いながら読ませていただきました。そのことが非常に印象深く残っています。そういう点では関西学院では留学生の研究がまだ十分進んでいませんので、『義塾史事典』を手本にしながら、先ほど大日方先生のご意見もありましたけれども、留学生の研究もさらに進めていきたいと思っています。今後いろいろと教えていただきたいと思います。

秋山　この機会に『日本女子大学学園事典』の紹介をさせてもらえたということはありがたいことでした。といいますのは、この『日本女子大学学園事典』をつくってもあまり反響はないんですよね（笑）、学内では使いますけれども、全体的にやはり学校は学校のなかのものという使い方になるんだと思うのです。ですからこんな『日本女子大学学園事典』を日本女子大学がつくったというのを、ちょっときょう紹介させていただけたのは嬉しいことでした、ありがとうございました。

大日方　これはあまり公にできないのかどうかわかりませんが、『福沢事典』は何部ぐらいつくったのでしょうか（笑）、どのくらいのシェアを目指されたのでしょうか。『義塾史事典』だと、たぶん塾の関係の方々等々を中心にしてということになるかと思うのですが、『福沢事典』の場合はもっと違う意味が出てこようかと思うので、そうした読者層と販路とかというようなことを想定すると、どんな具合かということを、ちょっといまのご指摘と絡まって気になったのです。

しかし、それはそれとして、これからやらなければいけないことを抱えている身としては、たいへん大きなきっかけを与えていただいたということで、感謝をしています。とくに、通史と事典をどう関連づけるのかという点で、これは慶應義塾の側と関西学院、それぞれの立場のご発言があって、非常に刺激的なところで参考にさせていただければと思います。きょう私以外に私どもの資料センターからも三人参加しておりますので、これをきっかけに少し詰める議論ができればと思って、感謝申し上げる次第です、どうもありがとうございました。

宮内　まず、本日はまったく歴史に関して門外漢である私に、このような機会をお与えいただきまして、またこんなにたくさんのオーディエンスの方にお出いただけたということを感謝申し上げます。

つぎに、先ほどご質問になられた池尾先生に関して、『三田学会雑誌』の一〇〇号記念号に、三田における、経済学部に限定されますが、その研究の歴史についてまとめた論文がいくつか出ておりますので、それが一つご参考になるかもしれません。それはわりと最近のものまで書かれております。ただ、残念ながら三田に限られております。一橋でどうであったかということは、ほとんど出ておりません。

本当に、また最後になりましたけども、これだけのものがあって、私の研究、知的好奇心も非常に満足というか、させることができました。そういう意味では非常に良い『事典』をつくってくださった編集に携わった方々に、改めてお礼を申し上げます。

司会　どうもありがとうございました。最後に福沢研究セン

ター所長の米山のほうから、ご挨拶をさせていただきます。たぶん部数の件も（笑）、お答えできると思います。

米山［光儀］ 先生方、きょうは貴重な時間、わざわざ時間をつくっていただきましてありがとうございました。もっと厳しくいろいろなご指摘も内心ではお持ちだと思いますが、こういう席ですので、いろいろとお褒めのことばもいただきました。先生方から出ている課題といいますか、これからやはりこれをどういうふうに活用していくのか、デジタル化をどうするのか、あるいは、学生向けにコンパクトにどういうふうにしてくのかという問題も、まったく考えてないわけではありません。『義塾史事典』ができたときに、すぐに前図書館長をやっていた杉山伸也先生に「デジタル化しよう」ということをすぐに言われまして、もちろん、きょうレジュメというか配付したものの中に「正誤表」を入れてありますが、『福沢事典』も、両方ともやっぱり正誤表を出さなければならないような状況になっています。デジタル化して、福沢研究センターのホームページなどに掲載しておけば、わりに訂正はやさしいかなというふうに思いますが、ただ、デジタル化したときに、僕らの世代がそうなのかもしれないのですけれども、部分的には読んでもらっても、なかなか全体を見てもらえない。そうするとなかなか、いま『福沢事典』を出したばかりでも「ここが間違ってる」という指摘を、福沢研究センターのほうにいただいていますが、そういったことがスピードとして若干遅くなるだろうと思います。その意味でもまず紙媒体のかたちで出させていただきました。

『義塾史事典』何部でしたか、四千でしたか、四千五百ですか。それから『福沢事典』は実は三千なんです、もちろんその中で寄贈分もありますので、実質二千七百ぐらいを考えていまして、すでに二千ぐらいは出ていますので、その意味では活用がなされているかと思います。

ちょっと話があちこちですが、いまできたばかりで、何となくほっとしているというのが実情なんですが、本来的に言うと『慶應義塾百五十年史資料集』というのが本体で、これはあくまでも別巻という位置づけですので、本体はどういうふうにつくっていくのか、そこのところがこれからの勝負だというふうに思っております。ぜひ今後もこの『事典』だけにかぎらず、『百五十年史資料集』も皆さん方に活用していただけるようなものをつくっていきたいというふうに思っています。きょうはどうも本当にありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました、多々至らない司会で申し訳ありません。本当にありがとうございました。

（了）